

日本幽囚記

映画文学人生論

ゴロヴニン『日本幽囚記』井上満訳 1943 岩波文庫

『日本俘虜実記』徳力真太郎訳 1984

講談社学術文庫

参考：司馬遼太郎『菜の花の沖』2000 文藝春秋

やっぱり日本としては西洋と交際するよりも、古来の立場を守った方が、よいのでは

ゴロヴニンの『日本幽囚記』は、1811年に国後（クナシリ）島で幕府役人に捕縛され、二年三ヶ月にわたり函館で幽閉された後、ロシア側が捕らえた商人高田屋嘉平衛と引き換えのかたちで釈放されたディアナ号艦長の回想記である。

これを読むと、今なお解決していない北方四島（エトロフ、クナシリ、ハボマイ、シコタン）領土紛争の原因や江戸時代の日本がキリスト教を禁教とし、鎖国に踏み切った理由がよくわかり、さらには戦争と平和の原因もすこしわかる。

レフ・トルストイの小説『戦争と平和』は『日本幽囚記』とほぼ同じ頃を描いた作品だ。『日本幽囚記』はその極東篇としても読める、

ゴロヴニンによれば、日本人は忍耐がよく、冷静に、しかも優しく囚人を待遇し、ロシア人の論証を聴取し、しばしば非難や罵詈雑言にも耳を傾けたという。そして、ヨーロッパ各国政府の頭によさと先見の明をほめたかと思うと、次第に話題を戦争の方へ持っていくって、不意にこう尋ねた。

「ヨーロッパでは戦争のないのは五年とは続かず、また二カ国が争いを起こすと他国も沢山その争いに割り込んで来て、ヨーロッパ全体の戦争になるようですが、一体その原因は何です」

ロシア側がその説明をしてやると、日本人たちは各国王の賢明さを賞賛し、こうたずねた。



日本幽囚記

映画文学人生論

「かりに日本と支那が西洋諸国と国交を開き交際するようになり、さらに、西洋の制度をまねるようになったら、人間同志の戦争は一層ひんぱんに起り、人間の血は一段と沢山流されるのではありますまいか」

それはそう成るかも知れないと、ロシア側が答えると、日本人たちは続けた。

「もしそうだとすれば、さつき、二時間ほど前にいろいろとヨーロッパと交際したがよいとご説明をいただきましたが、やっぱり日本としては西洋と交際するよりも、古来の立場を守った方が、各国民の不幸を少なくする意味でかえってよいのではありますまいか」

この思いがけない反駁を受けると、ゴロゴロニンは正直なところ云うところを知らなかった。その後の歴史をみると、この日本人たちの意見が正しかったといえなくもない。

幕末になって、日本は開国にふみきつたが、その結果、日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、第二次世界大戦に参加して、多数の人間の血を流した。

日本とロシアとの間では今だに北方四島の帰属に関する合意が成立していないが、もともと北方四島をふくむ千島に住んでいたのは日本人でもロシア人でもない。クリル人（アイヌ人）である。

てふてふが一匹韃靼海峡を渡っていった

安西冬衛